

聖嶽洞窟の真相

― ねつ造された疑惑 ―

栗田勝弘

はじめに

本匠村聖嶽洞穴の二次調査報告書『大分県聖嶽洞窟の発掘調査』が刊行された。国立歴史民俗博物館の春成秀爾教授の編集である。

聖嶽洞穴は一九六二年の一次調査で、化石人骨と細石器が同一層から出土した、わが国唯一の旧石器遺跡として注目され、一部の歴史教科書にも「聖嶽人」として取上げられてきた。しかし、一九九九年の二次調査において、人骨が歴史時代の可能性を指摘されるや否や、まことしやかな情報が先行し、聖嶽洞穴を捏造された遺跡として結論付ける週刊誌報道まであらわれた。

一次調査の責任者賀川光夫博士は、一部マスコミの悪意に満ちた報道に関して、「代表者である私の死により関係者の潔癖を証明し無謀な報道に抗議する」として昨年三月九日に自から命を絶たれた。

これまでは、週刊誌の記事の一方的な情報の流れであったが、二次調査報告書の刊行で学問的に真実を検証する共通の俎上
が形成されたわけである。

さて、この報告書の結論を要約すると、聖嶽洞穴は「長崎・佐賀県ないし福岡県の遺跡で表面採集した石器」を「いつの時

点かに散布した」もので「旧石器時代の遺跡ではない」という。週刊誌的に言い換えれば、聖嶽洞穴は捏造された遺跡ということであろう。ここでは、二次調査報告書が指摘した疑問点を7項目に要約し検討してみる。

問題点の要約

- ① 一次調査では遺物が一〇点前後ままとまって出土したが、多数設定した二次調査区は僅か二点の出土であり、水洗選別でも、石器や獣骨は出土しなかった。
 - ② 一次調査者は、人骨、石器の出土や、遺物「散布状態」を当初から疑問視していた節がある。
 - ③ 一次調査の石器は、近年の傷である「ガジリ痕」が多く、その割合も高い。
 - ④ 石材は全て西北九州産黒曜石製で、台形様石器と野岳型・福井型の細石器、縄文時代の四時期の石器がある。
 - ⑤ 西北九州産黒曜石製の台形様石器は東九州では皆無。野岳型細石核も聖嶽のみで形態・石材・分布からも異質である。
 - ⑥ 二次調査の人骨は、層中の放射性炭素測定と骨のフッ素含有量測定、形質人類学的研究の進歩から、中・近世の可能性が高く、一次調査の「聖嶽人」の評価の見直しは必至である。
 - ⑦ 石器点数が報告者により増減し、紛失や混入が懸念される。
- というものである。

問題点の検証

次に七項目に解釈を加え、矛盾点を止揚する検証を行う。

① 一次調査区は、表面観察と試掘から、長く、屈折した洞穴の中央部のやや膨らんだ部分に設置している。洞穴内での生活や墓地等の場所を選地する場合はこの付近が中心となろう。元々、生活に適さない環境で、埋葬・祭祀等の特殊な利用の場

合、遺物が希薄であり、水洗選別でも出土しないことはある。旧石器時代では、遺物のまとまりをブロックやユニットとして把握しており、限られた範囲に遺物が集中して出土する現象は、他の遺跡でも普遍的に認識できる。逆に、偶然発見した一級資料の周辺を緻密に調査しても、追加資料を獲得できなかった事例も枚挙に暇がないほどである。つまりこのような状態から、どんな情報を導き出し、どう解釈するかが調査の課題でもあり、調査者の力量とも言えるのである。

② 一次調査者も、遺跡の状態に当初から疑問を持っていたように捉えているが、それは、調査研究上での疑問や課題点であり、春成氏が調査時から抱いていた疑惑とは趣を異にする。二次調査報告書で「散布状態」を何度も引用し、遺物がばら撒かれた印象を示唆しているが、単に、散在・散乱の表現を散布としたもの。これが適切かどうかはさておき、賀川先生他の論文にも、この表現をしている箇所を指摘できるのである。

③ 西北九州地方の田畑で拾った石器だから、近年の傷が多く、その割合も高いと主張しているのであろう。しかし、そもそも、聖嶽洞穴は歴史時代も利用され、攪乱されていたのは周知の事実であり、石器に「ガジリ痕」が付いていても、何も不思議ではない。二次調査報告書に掲載された「ガジリ痕」資料を、そのまま視点を変えてみると次のようになる。ガジリ痕は一次調査の当初資料では25%、その後の石器混入が懸念される資料では35%を占める。つまり、ガジリ痕は、当初資料の割合より、それ以外の石器における割合が高く、一次調査資料にガジリ痕が多いとの主張は、主観的な事実誤認である。むしろ数値的には逆の結論を導き出している。

一方、二次調査で出土した石器二点を報告した総合研究大学院大学の津村宏臣氏は、「不規則な微細剝離痕」は「着柄状態からの脱落の際に生じたか、何らかの偶発的な状況」とし、微細な剝離痕を旧石器時代の石器とそれを取り付けた柄(シャフト)との関係で推察しているのである。しかし、春成氏の表現では、「刃部の欠損に不自然なものが多い」と津村宏臣は指摘：これらをガジリ痕と見れば2点ともガジリ痕があり：ガジリ痕が存在する石器を混しているのは聖嶽洞窟の石器の大きな特徴となる。かつて、東北地方で「神の手」を持っていたという藤村新一氏は、人の見えないものが見えたと言うが、教訓にした

いものである。

④ 時期が異なるのに、西北九州産のみの黒曜石が連続して持ち込まれるのは不自然という。石器の時期に関して、二次調査団長の橋氏は、台形様石器と細石器の共存は、以前からの持論とし、定型的でない石器を旧石器と縄文に弁別できるのかどうかも疑問としている。つまり、研究者によって、その見解は異なるのであり、二次調査団の中でも意見は分かれているという事は、軽々に結論付けができないことを意味しているのである。また、二次調査報告書では野岳型石核に加え、福井型石核の細石刃もあるという。僅か一点の細石刃の形では、二分の一の可能性で「想像する」に過ぎないのであり、これを時期の違いとするのは危険きわまりない。石器の形態や特徴が時期決定の決め手となり得なかつたことは、東北地方のねつ造が二十年以上もくり返されてきたことを、学問的に見破れなかつた現実からも学習せねばならないであろう。

仮に、たとえ遺物が複数の時期にまたがり、それが、何れも西北九州産黒曜石のみの組成であるとしても、聖嶽洞穴という特殊な環境とテリトリーでの移動生活、聖嶽洞穴に漂泊的に訪れる何らかの要因があつたものと理解するところからはじめねばなるまい。

これまでの研究成果を諮詢し、他に類例がなく、異質であるという理由で、疑わしいと結論を出すので在れば、学問上の新発見や新事実などの提示は、理論上、永遠に望めないことになるのである。

⑤ 大分の旧石器時代の遺跡は約五〇〇箇所であり、大野川流域で六〇%を占める。これらの遺跡では、大野川中・下流で拾える無斑晶流紋岩が主要石材であり、西北九州産黒曜石は偶発的で客体としての位置を占めたにすぎない。例えば、三重町百枝遺跡では数千点に及ぶ石器に伴(混)出して、二点の西北九州産黒曜石の台形石器が発見されている。異質といえ、それほど異質なものはない。

一方、日田・玖珠地方は、周辺に石材供給地がなく、石材のバラエティが豊富である。しかし、細石器文化期には、天瀬町平草遺跡で顕著なように、西北九州産黒曜石が主体となる。この遺跡で、特徴的な形態の石核を平草型細石核と呼称したが、

聖嶽洞穴の細石核は野岳型というより、むしろ平草型に相当している。その県内の分布をみると、船野型細石核の卓越する大野川流域を除く、県北地域(天草・五馬大坪・亀石山遺跡等)と県南地域(聖嶽洞穴)の山岳地帯に「住み分け」したように散見できる。

⑥ 県南地域の旧石器文化の究明はこれからであり、二次調査でより新しい事実が判明したとすれば、学問や科学の進歩であり、生前賀川先生も言われたように、むしろ喜ばしいことである。聖嶽洞穴出土の人骨に歴史時代のものが含まれていたことを、今回、初めて判明したように報道しているが、そのことは一次調査の報告でもすでに指摘すみのはずであり、今さらこの事実を誇張しても、聖嶽人の検証にはならないのである。

一次調査の人骨学は新潟大学、フッ素分析は東京大学であり、聖嶽洞穴二次調査員であるお茶の水女子大学の松浦秀治氏も、一九八四年には人骨のフッ素分析から旧石器人として指摘していたのである。今回の調査結果が当を得た分析で、いわゆる「聖嶽人」にも適用可能であれば、評価の修正はあり得ることは否定しない。

しかし、未解決の問題として、先の人骨のフッ素分析、出土した動物骨の放射性炭素年代(BP9940±60)、木炭の放射性炭素年代(BP9200±40)をどうみるのか考慮する必要もある。木炭は、縄文早期の炉の残映とも推察できるのである。

ここで注意すべきは、木炭の測定資料が当初の「結論」には無く、追加資料を加えて、はじめて現れた事実という点である。理論的には、もっと資料を加えれば、一万三千〜一万四千年前の旧石器を射程に納める新測定結果が出ないとも限らない条件を内包すると解釈できる。

つまり、僅少な資料では、問題点に結論を与えても、あらゆる可能性の一つを立証したに過ぎないと言うことである。そういう意味で、最新科学を駆使した複数の年代測定を、いわゆる「聖嶽人」で試みた後に、時期決定の判断を下しても決して遅くはないのである。まさに、二次調査報告書は画龍点睛を欠く典型ということであろう。

⑦ 遺物管理上の問題で、遺跡の本質、捏造問題とは全く次元を異にしている。

おわりに

以上のように、旧石器時代の遺跡のあり型は不可思議であることが多い。しかし、それが旧石器文化の特徴を具現する一つの要素と解釈できるのであり、その実態と真実に迫るには不可解な事象を不可解として見据えるところからはじめねばなるまい。資料が異質で、理解に苦しむからと、存在そのものまでも比定していたら、永遠に真理に到達することは望めないであろう。

二次調査報告書の七つの疑問点の結論は、②で代表される思い込みと、③、⑤で代表される事実誤認、①、④で代表される論理的な飛躍があり、公正に判断しようとしても、到底受け入れ難いものである。万が一、この二次調査報告書の結論に検討価値が残っていると、捏造疑惑とは次元を異にする⑥、⑦を除く、前記①～⑤項目の疑問点から、「表面採集した石器」の持ち込みを立証できないことは一目瞭然である。

東北の旧石器遺跡の捏造事件に誘発された、一部マスコミの「悪質な讒言と報道」に抗議して、一人一人が亡くなられた。その原因の一端は、聖嶽洞穴の二次調査中より、あらゆる機会で指摘したという遺跡・遺物に関しての不用意な発言にある。確かに、考古学者として真摯な疑問からの出発であったかもしれないが、奇を衒う方式の結論は、誠に慎むべきであり、軽率のそしりは免れないであろう。（詳細は「考古学ジャーナル」二〇〇一年一〇月号、第四七八号を参照して頂きたい。）